

子ども一人一人が納得する授業の改善

～思考力・表現力を伸ばす取り組み（ICT技術の効果的な活用2年次）～

主題設定の理由

①□ 教育の今日的課題から

平成20年3月に告示された新教育課程では、学習指導要領改訂のポイントとして「確かな学力」の育成のために、基礎的な知識・技能の育成と思考力・判断力・表現力等の育成が挙げられている。また、学習意欲の向上や学習習慣の確立、豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実が述べられている。

このことから、確かな学力の充実のため、子どもたち一人一人に目を向け、一人一人の実態を把握し、一人一人に応じた力をつけていくことが求められていると考える。

② 本校の子どもの実態から

本校の子どもの実態について、昨年度研究授業における学習に関するアンケートから、次のような課題があげられる。

学力検査分布図をみると、正規分布に比べて「普通」「やや定着が早い」子どもの割合が多いのに対し、「定着が早い」子どもの割合は全国平均と比較して低い。このことは、もっと伸びる可能性のある子どもに対する支援が不十分で伸ばしきれていないと考えられる。

したがって、特に定着の早い子どもの学習に対する意欲を高めたり、定着の遅い子どもに対する個別指導の充実を図ったりする必要がある。

学習課題に対してまじめに取り組むことができる。また、指示に従って学習する子どもも多い。しかし、答えがわかると進んで発表しようとする子どもが多いが、自分の意見や考えを説明するような発問に対して、進んで発表しようとする子どもは限られている。

発表しているときは、静かに聞くことはできるが、それに関連した考えや意見を、自分なりにとらえて発表できる子どもは少ない。表現力や考え方をさらに身に付けさせていく必要があると考える。

③ 教師の実態から

昨年度の実践の中から、教師側からも書画カメラやdbookの使用による焦点化など、ICT技術を取り入れた授業は有効であることが挙げられている。また、ICT機器を使ったり、自作のコンテンツを使う回数を重ねたりするうちに、授業での見せ方が改善されていったことも事実である。

しかし、①ICT機器の準備・設置に時間がかかる。②ICT機器の操作に慣れていないので、授業中に時間をロスしてしまう。③教材研究の場面でデジタルコンテンツを探したり、使ってみたりする時間がかかる。④デジタル教材の作成の方法がわからない。等の課題がある。

このように、設置と準備さえできていれば、ICT技術は効果的なことはわかっているが、教材研究の時間や機器の操作に慣れていないことによる、教師側の抵抗感があるのも事実である。

④ これまで研究の発展として

本校は、一昨年度授業改善研究協力校として、子ども一人一人に基礎的な知識・技能を確実に身につけさせ、自ら学び、自ら考える力の育成をめざした「一人一人を大切にする授業」の実現のために全職員で自らの授業の改善に取り組んできた。これは、教師自身の実践的な指導力の向上を図る上でも、本校の研究の発展としても大変有意義なこととして取り組みを続けていきたい。

また、ICT技術を取り入れた授業に対する子どもの反応は、①教科書で、今どこを学習しているのかがわかりやすい。②図や写真が大きく見えるのがいい。③どこに注目すればよいかわかりやすい。④授業に集中できる。など、子どもにとってプラスになることが多いことがわかった。よって、ICT技術を活用し、学習内容を焦点化させたり、視覚的にとらえさせたりすることにより、子どもの学習に対する意欲が高まり、また定着の遅い子どもに対する指導の改善を図ることができるのではないかと考えた。

以上のことから、本校では「子ども一人一人の学びを保障し、授業の終わりに一人一人が今日の学びを実感し満足感・達成感を得る」ことのできる授業の実現を目指して、研究主題を『子ども一人一人が納得する授業の改善～思考力表現力を伸ばす取り組み（ICT技術の効果的な活用 2年次）』と設定した。

研究の内容と仮説

①□ 研究の内容

本校では、これまでも子ども一人一人が納得する授業のために、「納得を生み出す教材・学習課題」「納得に導く学習活動」「納得を高める評価」の3点に絞って、算数科の授業実践を通して検証しつつ研究を進めてきた。

また本校は昨年度より、校内研修の中で、ICT研修も位置づけ積極的に活用していこうという取り組みを始めている。

コンピュータや携帯端末機、インターネット、デジタルカメラ、ハイビジョンビデオカメラをはじめとするICT技術の発展は、社会の生活や価値観に多大な影響をもたらしている。学校でも校内LANの整備や教育用ノートパソコンの普及、さらに電子黒板の設置など、様々な機器普及などからみても、学校教育においてICT技術が果たし得る可能性も年々高まってきている。また、教職員もICTを活用する機会が増え、学級事務や授業に活用する場面が多くなった。

昨年度から、これまでの研究を尊重・継承する中でICT技術を活用した授業実践を通して、「おもしろそう。やってみたい」という興味と、「やれそうだ」という見通しをもって取り組む教材・課題を提示したり、発達段階や個に応じ、教材・学習課題を提示したり、子どもたちが興味・関心をもち見通しをもって学習に取り組むかを研究の内容とした。

その中で、子どもの興味・関心を高める上で効果が期待できることや、授業の中で効果的に活用することで基礎・基本の習得に効果があることが確認できた。

しかし、授業におけるICT技術の活用は、算数科のみならず、各教科・領域において様々な可能性が秘められていると考える。特に本年度は、電子黒板が設置され、外国語の授業での使用方法を具体的に考えていく必要性も出てきた。

そこで本年度は、昨年度の研究を尊重・継承する中で、算数科に限らず、各教科・領域において、ICTをもっと授業の中で活用していくことで、子どもたちの学習意欲を高めたり、表現力を

高めたり、納得を高めたりすることができないかと考えている。

これらを踏まえた上で、次の3点を研究の内容として実践にあたることにした。

○ **納得を生み出す教材・学習課題（課題提示の際に活用）**

本研究では、授業の導入の段階で提示する教材や学習課題が納得への第一歩ととらえている。そこで、「納得を生み出す教材・学習課題」とは、子どもたちの実態を把握し、どの子どもも「おもしろそう。やってみたい」という興味と「やれそうだ」という見通しをもって取り組む教材・課題を提示するということである。発達段階や個に応じ、どのような教材・学習課題をどのような場でどのように提示したら、子どもたちが興味・関心をもち見通しをもって学習に取り組むかを研究の内容とした。

○ **納得に導く学習活動（子どもが説明する時に活用）**

「納得に導く学習活動」とは、どの子どもにも、課題に対して考え取り組む時間と場を保障するということである。本校では、学習活動の基本的流れを一人学び（自力解決）の時間と場からグループで学び合う時間と場、そして全体での学び合いとした。その中でも、算数的活動を取り入れて考える一人学びの時間と場をできるだけ多く確保しつつ、ペアやグループや全体での学び合いとどうつなげていくか、また、それぞれの場での学びのさせ方はどうあればよいかを研究の内容とした。

○ **納得を高める評価（本時の学習の振り返りにおいて活用）**

「納得を高める評価」とは、たとえ間違った考えでも否定するのではなく、クラスのみんなのよりよい学びのために、みんなの思考を活性化させるものとして前向きに評価し、子どもたち一人一人に自信とやる気をもたせるとともに、学んだことのよさをより感じさせる評価を工夫するということである。そのための評価はどうかを大きく分けて自己評価と相互評価、そして教師による評価の3つを対象として研究の内容とした。

② 研究の仮説

【仮説1 納得を生み出す教材・課題】

子ども一人一人のきめ細やかな実態をつかみ、それに応じた教材・学習課題の提示に ICT などを活用すれば、子どもたちは納得への第一歩を踏み出すことができるであろう。

【仮説2 納得に導く学習活動】

子ども一人一人のきめ細やかな実態をつかみ、それに応じて子ども一人一人が自分の考えをもてるような学習活動や互いの考えを交流する場において ICT などの活用することにより話し合いを焦点化したりしていけば、自分の考えに自信をもち確かな学び・納得につながるであろう。

【仮説3 納得を高める評価】

子ども一人一人のきめ細やかな実態をつかみ、それに応じて子ども一人一人に自分で解決できた喜びを味わわせたり、解決方法を認めたりするような評価の場面でも ICT を積極的に活用していけば、自分自身の学びに納得することができるであろう。

